



連載 関係からみた子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授, くじらホスピタル

母親に近寄っては離れていく男の子

K男：初診時3歳10カ月。知的発達水準：軽度精神遅滞。

主訴：自閉症ではないか。どのように接したらよいか教えてほしい。

発達歴：周産期、とくに異常はなく、満期正常分娩。母乳で育てたかったが、母乳が出なかったので人工栄養で育てた。乳幼児期早期はよく笑っている子だった。抱っこも好きでよく求めてきた。そのため当時は母親として違和感をまったく抱かなかった。しかし、1歳をすぎてもことばが出ないことが少し気になり始めた。でもいつかは出るだろうと思っていた。

1歳半健診で、頭に布を置いたときに布を取り払うかどうかの検査を受けたら、K男は布を取り払わなかった。検査中はずっとなされるがままで、まったく抵抗を見せることはなかった。そのため、おかしいなと一瞬思った。しかし、当時行きつけのホームドクターからは大丈夫でしょうと言われた。

2歳を過ぎて、名前を呼んでも振り返らないのが気になり始めた。しかし当時、姉の中学進学を受験で母親は忙殺されていた。毎日姉の塾への送迎をしたり、勉強の手伝いをしたりして、姉の受験勉強に心血を注いでいた。幸いK男はおとなしくて手がからなかったため、それをよいことにしてあまりK男には手をかけなかった。2歳ころから同じ年頃の子どもを怖がるようになり、またさかんに同じことを繰り返すようになった。ことばの遅れもみられ、気に入ったせりふばかり口にする。要求はことばでは表現することなく、親の手を引いて欲しい物のほうまで連れて行っていた。

3歳で幼児教室に通い始めた。そこで担当者に「コミュニケーションがおかしいですね」と指摘された。母親はそれを聞いてたいへん驚いたが、そのときは半信半疑だった。しかし、父親はそれ以前から気にしていた。そのため、両親はK男のことをめぐってよく言い争いをした。まもなく、子ども福祉センターに出かけたところ、そこで自閉症と言われた。さっそく週1回の療育を受けるようになった。

3歳半でことばが出始めたが、独り言で同じフレーズを繰り返すことが多く、会話にはならなかった。その後まもなく筆者の外来を受診した。

初診時の親子のかかわり合いの特徴

家族そろって診察室に入ろうとすると、K男は少しいやがり抵抗を見せた。初めての部屋で怖かったのであろうが、まもなく親と一緒に入室することはできた。診察室の雰囲気ですし落ち着き始めると、部屋に置かれた玩具を手当たりしだいに手に取って扱い始める。すぐに母親のほうに視線を向けて、顔色をうかがうようにして手に取った玩具を扱うのをやめる。玩具のほうに行ったかと思うと、すぐにソファに座っている母親のほうに戻ってくる。そうかと思うと、すぐにまた母親から離れて玩具のほうに行ってしまう。そして、再び母親のほうに戻ってくる。このように母親のほうに近づいたかと思うとすぐに離れるという行動パターンをしばしば繰り返していた。母親はソファに座ったまま、遠くからK男にさかんに指示的なことばをかけていた。

母親に対する強いアンビバレンス

K男は母親に対して構ってもらいたい(甘えたい)という気持ちが強いことが、何度も母親のほうに戻る行動で感じられたが、なぜか母親に近づいてはすぐに離れてしまっていた。ここにK男の強いアンビバレンスが感じ取られたが、それを強めている要因の一つに、母親のK男の行動に対する過敏な反応があると思われた。なぜなら、K男は母親に甘えたいという思いをもちつつも、母親からの注意や指示の言葉かけによって突き放されるような感じを抱き、容易に近づけない状態にあると思われたからである。

それでも、K男がさかんに母親の顔色をうかがう行動(母親参照といわれる行動である)を見て、筆者はそれを、母親を頼りにしているサインとして肯定的にとらえることができた。さらには、K男の表情を見ていると、時に恥ずかしそうに、うれしそうに、そしていやそうにしていることから、K男の気持ちがこちらに伝わりやすいことも感じ取り、そのことも母親に伝えた。つまりはここで筆者はK男の気持ちの動きを、代弁しながら母親に説明していたのである(「筆者の助言1」の項で詳述)。

K男は筆者のそばにもよく接近するが、こちらが抱きかかえようとすると、激しく拒否して、身体を固くして抵抗を見せた。それでも何度も試みているうちに、K男の身体はしだいに柔らかくなり、抵抗が薄れていく手ごたえを感じた。しばらくは先ほどの母親に対して見せたように、筆者のほうに接近しては離れること

を繰り返していた。

両親との話に熱が入っていたときであった。K男は一つの小さな積み木を手を持って、父親の頭にそれを乗せようとしたのであろうか、父親のほうに近づいていった。母親はそれを見てすぐに〈だめでしょ!〉と強い調子でK男に注意した。母親はK男の一挙手一投足に対して、他人に迷惑をかけないかとかなり過敏になっていたのであろう。K男の行動すべてにわたり否定的に受け止めやすい状態になっていた。母親はこの1年間、姉の世話ばかりしていて、K男を放っておいたことに強い罪悪感をもっていることも語った。自分の育て方が悪かったから、K男がこうなったのではないかと自分を責める気持ちが強いことが感じられたのである。

筆者の助言1

そこで筆者は以下のように両親に助言した。まずはK男が母親のほうに近づいては離れていくことを繰り返す行動の意味を取り上げて、K男は母親に対して構ってもらいたい気持ちがとても強いのだが、いざ近づくとなぜか不安緊張が高まり離れていく気持ちになっているのではないかと説明し、いまのK男には母親に対する強いアンビバレンスがはたらいていることを述べた。その際、母親に対する強い思いを肯定的に取り上げ、強調しておいた。ついで、両親にはK男を「自閉症だから○○だ」と一般の自閉症理解に当てはめるような、教条的で固定的なイメージをもたないように述べるとともに、K男のいろいろな行動が彼のどのようなところの動きを反映しているのか、じっくり見ていくことが大切だと付け加えた。そして、母親には、K男の気になる行動に対して指示的な言動を極力減らすようにと助言した。

●第2～3回

母親は子ども二人の世話でかなり強い疲労感を訴えていた。そのため容易には母親の荷立ちは軽減しなかった。それを察してか、K男は母親に相手をしてほしいような動きを見せるのだが、表立っては相手を要求しない。一人で玩具を前にして、手を出してはすぐにその手を引こうとするなど、玩具を扱うことにもためらう気持ちが強く感じられた。そうしたK男の行動が母親のいらだちをいっそう強めるという負の循環が二人の間をさらに難しいものにしていった。しかし、筆者はそのことをここでことさら取り上げることは控えた。母親の自責感を強めるだけだと思われたからである。母親の疲労感をいかにして緩和するかということにころを

碎いていた。

共同治療者がK男の相手をして遊んでいたが、途中から母親が加わって一緒に遊び始めると、先ほどまでのびのびと遊んでいたにもかかわらず、急に落ち着かなくなり、動き回るようになる。何をしても手につかない感じで、いつまでも部屋中を動き回り、どこか取りつく島がない状態である。K男は何かしようとするすぐにほかのことが気になり、気移りする。そしてまたほかのことへ…この繰り返しで、いつまでも落ち着かない状態にあった。頭のなかがいとも騒々しい感じである。このような状態にあっては、K男が自発的に何かをすることはとても難しく、集中できな
いと思われた。

●第4回(1カ月後)

K男が同じ遊びを繰り返していると、母親はそれをじっと見ているのがつらいので、ついK男をほかの遊びに誘ってもっと楽しませてやりたくなっていった。たとえば、K男がクルクルスロープに丸い球を転がして回転するのを夢中になって見ている。すると、母親はほかの遊びをさせたくなくて、赤い丸い球を手にとって「これきれいよ、これやってみようか」と勧める。K男はすぐに「いや!」と拒否するが、それでも母親は繰り返しそれを勧めていた。ついにK男は折れて、それを手に持つが、いかにもいやそうに「きれい!」と発している。K男は球がくるくる回って動いている様に関心が引き寄せられていると思われたが、母親には同じことの繰り返しにしか見えなかったであろう。そのためほかの色の球を見せては、違う遊びを勧めたくなっていたのである。

母親の見捨てられ不安

このようにK男が遊んでいることに母親が口を挟むと、それがK男の遊びの流れに沿っていないために、K男は拒否的反応を示している。それにもかかわらず母親が自分のほうにK男を誘いたくなるのは、母親自身がそこで自分を拒否される不安、つまりは見捨てられ不安を刺激されていたためではないかと思われるのである。

こうした母親の干渉に対してK男は回避的になり、同じことを繰り返す遊びの世界に逃避することで自分を守ろうとしているように見えた。このような母親の先取りの関与がK男の注意散漫を引き起こし、ほかの物への気移りを結果的に引き起こしていると考えられたのである。

筆者の助言2

そこで筆者は以下のように母親に助言した。自分のほうから子どもに何かをさせなければという思いが強いようだが、そのような気持ちをもたなくてもいいこと、何かしなければという思いを解き放ち、手を抜くことが大切であること、そしてK男の行動の意味と一緒に理解するように心がけていきたいと思いますと述べておいた。K男の繰り返し行動は、単に同じことの繰り返しではなく、そのなかで微妙に変化する感じを楽しんでいるという肯定的な意味があることを説明し、子どもの行動をしばらくは見守りながらつきあい、彼が何をどのように楽しんでいるのか、じっくり見ていきたいと思いますと伝えた。

●第5回

母親の肩の力が少しずつ抜けてきた。そのためであろうか、自分のこころの内や家族の心配事などを筆者に自分から話すようになった。以前はドキドキして、いつも誰か一緒にいてくれないと心細い感じがあった。そんなときには家事に集中することによって忘れるようにしていた。家事に入るまでの何もしない時間が一番嫌いだという。さらには自分の母親(K男の祖母)の具合が悪いので心配なこと、そして父親についても思い出話を語り始めた。父親はとても周囲に気遣う人で、いつもびりびりしていた。父親がそばに来るだけで緊張していた。背筋をいつも伸ばしていないといけなような人だった。大好きだけど、母親と一緒にいて初めてゆったりできた。ゴミ一つでも落ちてると気にしていた。印象深い思い出として以下のような話が語られた。

母親の子ども時代が想起される

両親と私、三人で旅行したときはまるで「強化合宿」みたいだった。予定どおりの行動をするようにいつもせかされていた。周囲の人への気遣いからではあったが、つねに他人に迷惑がかかるから、早くしなさいとせかされていた。もちろん、私たちのためによくやってくれていたと思う。父親は家族思いだが、周りの人たちに気を使い、旅行のときには予定をびりびりと決めて出かけ、少しでも予定に遅れそうになると、私たちにせかせていた。だから私たちにとって家族旅行は「強化合宿」のようなものだった。ゆったりとリラックスして楽しむようなものではなかった。父親

がいると背筋を伸ばしていないといけないようで、いつもびりびりしていたというのである。

これまで筆者は母親との間で、K男にかかわる際の母親自身の気持ちを常に取り上げて確認してきた。母親はK男の行動を見ていると、なぜかせかせたくなる自分の気持ちに気づくことによって、このような思い出が想起されていったのである。このような思い出話から、(K男の)母親自身も親に対して甘えをめぐるアンビバレンスの強い子ども時代を過ごしたことが明らかになってきたのである。

●第6回(2カ月後)

母親に少しずつ落ち着きを感じられるようになってきた。第4回で筆者に、ゆったりと構えて、自分から積極的にはたらかける必要はないと言われたことが救いとなっていることが語られた。このように母親には自分の内面を振り返ろうとする内省的態度が生まれつつあった。

そこで筆者は母親に次のようなことを考えてもらった。K男の遊びを見ていて、動き、テンポをどう感じるかと尋ねた。すると「慌ただしい」「せかせかした感じ」と答えるとともに、母親自身も慌ただしくて飽きやすいことに自ら気づいて語るようになった。自分もそうだとすることに気づいたのである。そこで、筆者はK男のいまの状態を見て、「せき立てられる感じで」「(自分が)なにかに動かされているように感じられる」と母親に伝えることで、母親にもいまの自分の生活が時間に追われて、毎日慌ただしく、せかされるような感じであることに目を向けてもらった。母子双方の慌ただしい感じが、両者間で負の循環を生んでいることに気づいてもらうことがねらいだった。

このような説明は母親にはとても納得のいくものであったようであり、治療開始当初の自責感は薄らぎ、筆者の助言を前向きに受け止めていた。

●第7回

以前、母親はK男の言動の意味がまったくわからず、注意ばかりしていたが、このころにはK男の言動の意味が少しずつわかるようになってきたことを、新しい発見をしたようにうれしそうに日記に書いてきて筆者に見せてくれた。そこには次のようなエピソードが綴られていた。

二人で外出していたときだった。K男がさかんに母親に何か言っているのだが、それがわからなくてどうしてよいか困ってい

た。先日から(お弁当屋さん、丸くなった)とさかんに母親に言っていたことを思い出した。即座にはわからなかったが、その店の看板が変わっていることに気づき、その看板が丸くなっていたというのである。K男はそのことを自分に伝えたかったのだとそのとき初めて気づいた。それが母親にもわかり、とてもうれしくなった。K男にそのことを言うと、にっこりしてうれしそうに反応したというのである。

母子二人の世界

このような感動的なエピソードを、まるで子どものように、素直に、うれしそうに筆者に報告する母親の態度がとても印象的であった。このことが契機となって、母親もK男に合わせて遊びに参加しようとする積極的な姿勢が見られ始めた。

ごちないながらも母親は子どもの動きに少しずつ合わせるようになっていった。K男はそんな母親の関与がうれしくて仕方のない様子である。母親と筆者が話し始めると、二人の間に割って入り、母親を自分のほうに引っ張って、母親と二人でボールテントの中に入って遊び始めた。周囲から守られた一番安心できる場所に母親と一緒に遊んでいるのである。筆者が母親と話していると、筆者の足をさりげなく踏んで去っていく。筆者に対する親近感と怒りの感情をこのようなさりげない行動で示していることに、筆者はK男の控えめでかわいらしい表現を微笑ましく感じ取り、それを母親に語ることによって、母親もK男の何げない行動の背後に、いかにK男の気持ちが反映しているか、しだいに気づくようになっていった。

●第8～9回(3カ月後)

母親の口から、先日家族で旅行に出かけたときのエピソードが語られた。旅館に行くまでの道中、長い坂道だったが、最初K男は「歩く!」と元気よく宣言して張り切っていた。しかし、しだいに疲れてきたのが抱っこを要求してきた。母親は、さっき自分で歩くと言ったでしょ、と励ましたときだった。K男は穏やかに甘えた口調で、〈大きな船はタグボートを運ぶ!〉と要求したというのである。〈タグボート(自分)は大きな船(父親)が運んでくれる!〉と言いたかったのだらうと母親はすぐにわかり、そのことを父親に伝えると、すぐに父親が抱っこをしてくれて、無事目的地に到着することができたというのである。

このようなエピソードを語るとき、母親はK男の気持ちが理解

できたことを心底喜んでいるのがひしひしと伝わるのだった。

甘えてくるK男に、思わず遊びを誘う母親

この回のセッションでの一場面である。共同治療者とK男が遊んでいた。すると突然K男が母親のほうに接近して、頭を母親の膝の上に突っ込むようにして飛び込んできた。そのときすぐさま母親はK男を受け止めたが、まもなく遊戯室の左奥にぶら下がっていたサンドバック(ボクシング用)が目に入ったのか、母親は急にK男に向かって(あれ(サンドバック)にバン! と叩いてきて!)はたらきかけた。するとK男はすぐさま母親に言われたように、サンドバックのほうに行って叩いたのである。

このとき筆者はとても驚いた。K男は(アンビバレントながらも)母親に甘えたくて飛び込んでいった。たしかに、母親は一時K男を受け入れたのであるが、すぐさまK男をほかの遊びに誘うことで、彼の関心をほかのことに移そうとしたのである。なぜこのような行動が咄嗟に現れたのか、そのことをすぐにその場で取り上げ、一緒に考えることにした。なぜならK男がせっかく母親を求めて接近し、屈折したかたちではあっても勢よく抱きついてきたのである。それにもかかわらず、なぜ母親はK男の気持ち(甘え)をしっかりと受け止めることができなかったか、そのことを問題にしたかったのである。

するとすぐに、母親は以下のことを語り始めた。自分の父親が仕事人間で休みなくはたらいていた。そんな人だから、自分がのんびり何もしないでいるということは耐えられないのだろう。自分もそんな父親の影響を受けている。ついこのような対応をしてしまうのはそのためだろうというのである。このときの母親は深

く感じ入ったようで、しみじみとした語りは筆者のころにも深く響いてくるものがあった。

このようなエピソードを重ねることによって、母親はK男の日頃の言動の意味を感じ取ることが容易になるとともに、そのことをK男に伝えることで二人の関係は急速に深まっていった。それは見ていてとても微笑ましい光景に映った。毎回筆者に届けてくれる日記には、日頃の何げない出来事のなかでのうれしい発見が楽しそうな文面で綴られていた。

何げない言動の背後にはたらいているものに着目する

常に筆者が心がけていることは、子どもの行動を病的なものか否かといった視点から捉えるのではなく、その行動の背後にはたらいている気持ちに焦点を当てて考えていくことである。子どもはなぜそのような行動をとったのか、その動因(動機)に着目し、その意味を考えていこうというものである。その際、とりわけ重要だと思うのは、日頃の何げない言動の背後にはたらいているものに着目するということである。なぜなら、それらの言動にはその人の歴史が深く反映しているからである。このことは養育者をはじめとしたわれわれ自身にとって、とりわけ重要な意味をもっている。いま目の前で展開している親子関係の様相をつぶさに観察するとともに、そこには養育者自身のこれまでの歴史がさまざまなかたちで反映しているということにも気づく必要がある。なぜなら、いま子どもの相手をしている養育者自身も、常に子ども時代の自分を重ね合わせながら生きているからである。